

論文概要

地域共生に向かう作業療法プロセスの分析 —ニカラグアの障害児支援におけるビーズ手芸実践事例から—

研究の目的と方法

高齢化社会が急速に進展し、かつ自然災害の多発する日本では、今日、介護保険サービス、医療保険サービスなどのフォーマルなサービスだけでなく、地域において、様々な支援が包括的に、切れ目なく提供されることの必要性が認識されており、厚生労働省は、「地域包括ケアシステム」の実現を掲げている。作業療法においても、病気や障害のある人だけを対象とするのではなく、地域住民の健康や生活をいかに守っていくかという視点が強く求められるようになっている。

本論では、ニカラグアで行ったビーズ手芸活動が、次第に地域社会との多様な繋がりに展開していった経験より、作業療法を通じた人々の関係変容に着目する。具体的には、セラピストと施設利用者といった固定化された役割や関係性のもとで行われてきた作業療法の視点を、個人と社会の多様な関係性へ目を向けるよう転換することで、主体間の新たな関係性の構築が促され、活動が地域社会とのつながりへと展開していくプロセスを明らかにする。続いて、ニカラグアの事例と福島県の仮設住宅集会所における作業の実践事例との比較を通じ、作業療法の新たな可能性とその課題を示すことが目的である。

現地調査は、対象地であるニカラグアのチョンタレス県フィガルパ市において 2015 年 12 月 19 日～2016 年 1 月 3 日および、2016 年 9 月 27 日～12 月 1 日の 2 回に亘って実施した。ビーズ手芸活動に何等かの形で事例に関わった人々に対する非構造的インタビューおよび参与観察を行った。

論文の構成

第1章 はじめに

- 第1節 研究背景と問題の所在
- 第2節 研究目的
- 第3節 研究方法
- 第4節 論文の構成

第2章 作業療法の概念的検討

- 第1節 作業療法の歴史
- 第2節 作業療法における「作業」の意義
- 第3節 現代の作業療法
- 第4節 障害理解のモデル
- 第5節 本論文の視点

第3章 ニカラグアの障害児支援施設における作業療法実践

- 第1節 ニカラグアの概要
- 第2節 ニカラグアの障害者を取り巻く状況
- 第3節 調査対象地及び対象施設ロス・ピピートスの概要
- 第4節 ロス・ピピートスにおける作業療法の実践過程の分析

第4章 作業療法概念の再考—日本とニカラグアの実践事例を比較して—

- 第1節 福島県二本松市の仮設住宅集会所における作業療法実践
- 第2節 二つの事例の比較
- 第3節 作業療法の新しい役割と可能性 —「社会モデル」の視点から—

第5章 結論と展望

- 第1節 総括と結論
- 第2節 今後の課題と展望

論文の概要

本論は、5つの章で構成されている。第1章では、本研究の背景、目的、方法を述べ、全体像を明確にしている。

第2章では、日本において、身体障害領域における作業療法が進展するようになった歴史や作業療法の定義をまとめた。とくに、これまでの作業療法における「作業」の定義と意義を明確にしたうえで、日本における医療福祉を取り巻く現状を総括し、これからの作業療法の方向性を展望した。続いて、「障害の社会モデル」の概念を「障害の医学モデル」と対比しながら、作業療法の対象となる「障害」とは何かについて検討した。また、近年の社会モデルに対する批判を指摘したうえで、「障害」は個人と社会の多様な関係性や価値によって生じるものであるという本論の立場を示した。最後に、障害のモデルと作業療法の関係性および「作業」を分析する枠組みを提示した。

第3章では、ニカラグアの障害児支援施設において始まったビーズ手芸活動実践を分析した。始めに、対象国ニカラグアの概要とニカラグアにおける障害者を取り巻く状況および、現地調査の事例となる施設の概要を述べた。続いて、経時的な実践過程を、「信頼関係構築期」「ビーズ手芸定着と参加者の交流拡大期」「施設活動拡大と参加者の意識変容期」「地域社会との関わりの拡大期」の4期に分類し、人々の関係の段階的変化、多様な場の創出、地域社会とのつながりの拡大という3つの視点から、ビーズ手芸活動のプロセスと、そこで生じた人々の関係性と社会との関わりを分析した。

人々の関係性の段階的変化では、「ビーズ手芸」を介し、職員と筆者の相互の信頼関係が築かれた。そこから、利用者が集まり始め、利用者同士における相互関係も深まり、近隣住民や家族との繋がりが拡大した。利用者同士の相互の関係性の深化が、施設スケジュールの安定や、家庭訪問の開始へと繋がり、作品販売の活発化が、職員や利用者の主体性を生んだ。また、地域住民と関わる機会が増加したことが、外部組織と連携した活動へと発展していった様子が明らかになった。

続いて、現地調査の結果を元に、障害児者を有する家庭の生活実態と障害児の母親に共通する経験や心情を明らかにし、障害児者をもつ家族に対する支援の重要性を確認した。ビーズ手芸活動が生み出した場の機能としては、①共感し合い、癒される場、②自尊心が得られる場、③学びの場、④楽しい、気晴らしになる場、⑤リハビリ（機能訓練）の場、⑥社会とつながる場の6つが挙げられた。その中で、利用者同士の関わりは、それぞれの立場や役割、関係性によって、自然に調整されていることが分かった。セラピストと利用者は、機能訓練場面における会話の中で、セラピストは、専門的な視点から、母親が子ども障害を客観的に把握し、受容できるよう働きかけ、勇気づける役割を担っていた。同時に、日常生活の様子など、障害のある人の社会的背景について利用者から教えてもらうという相互の関係性が認められた。職員は、利用者の声に耳を傾け、励ましたり、明るく元気づけたりする存在であり、施設が楽しい場として認識されるのに重要な役割を果たしていた。

ビーズ手芸は、作品製作だけでなく、販売、購入、作品作りの見学など、その関わり方に多様性があり、機能訓練に比べて、作品製作実践者に限定されない多様な活動を展開できることが示された。この結果を踏まえ、活動の地域への展開から、ビーズ手芸による①経済的側面、②文化的側面、③医療的側面、④共同性を生むという側面、⑤社会的側面という5つの文脈が導かれ、地域社会への具体的な展開が確認された。また、施設内に比べ、施設外では、より自然でプライベートな会話が繰り広げられており、そうしたプライベートな経験共有の積み重ねが、主体間の相互理解と親密な信頼関係の構築に繋がっていることが明らかになった。

第4章では、福島県の仮設住宅集会所での作業の事例と、ニカラグアにおけるビーズ手芸活動実践事例の比較を通して、作業療法概念の再考を試みた。二つの事例における活動の展開過程と、作業を通じた人々の関係変容を比較すると、「一時的」に、「個人」が集まり、支援者の側から対象者へ「受動的」に作業を行っていた場が、次第に、「定期的」な楽しい、気晴らしになる場へと変化したこと、作品販売を通じて、「仲間」としての意識や活動に対する意欲が高まり、そこから「主体的」な活動への参加やより親密な関係性が導かれ、次第に活動が「地域社会」での展開に繋がっていったことが共通している。その中で、意思決定の主体は「支援者」から次第に「当事者」へ変化していくという、プロセスの同型性が示された。このプロセスには、対象者を限定しない「外部に開かれた柔軟な構造をもつ」という特徴や状況の変化に応じて柔軟に対応していくというプロセス重視の活動展開が見られる。また「作業」が、その空間的な「場」を作るきっかけとなり、その「場」における協働から共同性を生み、各主体を地域社会とつなぐツールとしての役割を果たしていた。

最終章となる第5章では、本論を総括し、今後の課題、展望を考察した。

本論を通して、「地域共生に向かう作業療法」とは、各主体が時間を共有する中で、新しい人間関係を築きながら互いのニーズを把握し、適切な時期に適切な支援を補い合いながら、地域住民の健康や生活を守っていくアプローチであると結論づけた。その中で、作業療法士には、よりよい地域社会を築いていく一員として、そのプロセスに貢献していく役割が求められる。

一方で、このプロセスは、障害当事者および日常的に障害当事者と関わる機会のある人びとと、そうした機会の無い人びとの間の社会関係を変容させうるか、すなわち社会モデルが求める公的な社会空間での関係変化にまで関与することができるか、については、その可能性は示せたものの、実際に当事者の社会参加が進展したかは実証されていない。また、作業療法の地域展開に大きく影響していることが考えられる「外部者」の影響や役割についての分析は、今後の課題である。